

種 名 アケビ

万葉時代の呼名



詠人作者未詳

万葉集卷十一 一九二八

狭野方は実にならずとも花のみに
咲きて見えしそ恋の慰めに

【現代訳】

あけびは実にならなくても結構ですから花として咲いて見せてください。私の慰めに。

【アケビの解説】 アケビ科蔓性落葉低木

茎はつるになって他物に巻き付き、古くなると木質化する。花は4～5月に咲き、木は雌雄同株であるが雌雄異花で淡紫色。成熟した果実の果皮は心皮の合着線で裂開し、甘い胎座とそこに埋もれた多数の黒い種子を裸出する。この胎座の部分は様々な鳥類や哺乳類に食べられて種子散布に寄与する。種子を包む胎座が甘みを持つので、昔から山遊びする子供の絶好のおやつとして親しまれてきた。その他、成熟した蔓はかごを編むなどして工芸品の素材として利用される。江戸時代から明治時代にかけては高級品として珍重された。